

丹羽氏による棚倉築城について (2) -本丸の復元的考察-

正会員 ○ 古川敏夫

1. はじめに

近世棚倉藩は前稿『築城の概要と経緯』の中で述べたように、丹羽氏の棚倉就封から始まる。中世以来の赤館古城は城地として不相当であり、街道を主軸とした城下経営が出来ない理由による。本城沿いの街道に町家と武家屋敷を区別して配置し、街道の木戸口や城下を縦横断する用水を施設した計画性があり積極的に城下経営を行っていくための基盤整備として位置づけられる。

本城と城下町の普請にあたっては、すべて丹羽氏の負担であるため築城費用が掛からず、短期間に完成するため北郷馬場近津宮社地に築くことになった。

本稿では、丹羽氏が寛永3年に完成した本城の縄張や本丸の規模、形式を検討し、城下を描いた城絵図他史料から棚倉城本丸の復元的考察を述べる。

2. 棚倉城の規模について

棚倉城は現棚倉町台地上のほぼ中間に位置し、城下の北から南東へ玉野堀川(根小屋川)、南から北西へ大草川(現、久慈川)が流れ、川崖の土手を形成して天然の要害となっている。本城は本丸、二の丸、三の丸から構成され、本丸を二の丸が取り囲み、三の丸は北西側に林曲輪として位置し、東西約220間、南北約275間の広さである。城下町は主街道の水戸道が縦断し、奥州道や磐城浜街道、那須道とも接続する交通の要衝に当たり、北の玉野堀川より南の大草川岸までの街道筋は約22町、東西の幅は約4町35間である。

棚倉城の規模については詳細な内容を表す絵図として正保絵図があり、本城の櫓や門の位置と平家、重層の区別、基数、塀作事が分かる。正保年間(1644~1647)藩主内藤豊前守の代に奥州棚倉城之圖として描かれ、縦5尺横7尺の大きさで、丹羽氏が寛永3年(1626)に完成させてから20年程経た時期で、丹羽時代の城郭や城下を知る上で大変貴重な史料である。

別表(1)に「旧記」「東白川郡史」「慶応3年引渡文書」と「正保絵図」の記載内容を比較した結果、若干の違いが見られる。また、現況測量図が棚倉町都市計画図としてあり、「正保絵図」との整合性の上で重要である。特に、本丸御殿を囲う多聞櫓圍繞の描写と土居や堀など

の城郭縄張の記入寸法は精度が高いと言ってよい。

3. 本丸の作事について

正保絵図にはそれぞれ櫓、門、御殿、塀等の作事が描かれ、本丸については平櫓、二重櫓、多聞櫓、御殿の屋根は柿板葺で平門、塀は板葺であり、二の丸は門、塀すべて板葺で作事され、壁は本丸、二の丸、御殿外部すべて土壁である。寒冷地での漆喰塗りは凍結による剥離の問題で悩まされ、軒裏まで含めた惣塗込め仕上げは特別な塗工法と見て良い。盛岡城、久保田城、米沢城、二本松城では土塀作事が多い。また、丹羽氏は漆喰塗の材料、職方の確保には工期や費用が掛かるため採用しなかったと思われる。

正保絵図には切妻で板葺の大手門(追手門)、裏門として北一門、南門、西側に搦手門と埋門の計5門で二の丸を守り、門の出入りには番所、蔀土居構えが見られる。本丸は北と大手筋に柵形門を構え、本丸御門は櫓門形式

棚倉城の規模(記入項目は本丸、二の丸の範圍とし城下は除く) 別表(1)
 棚倉町史第3巻に記載がある旧記と慶応3年(1867)に松平昭守より阿部家へ引渡した際の文書の記述を一覧にした。比較のため旧記に東白川郡治史を慶応3年文書に正保絵図にある記載をのせた。旧記と東白川郡治史記載の内容は同一である。旧記にある多聞櫓の332間は誤記である。

	旧記	慶応3年文書(松平家より阿部家へ引渡時)
・城地	*赤館より南に當て9町半27間引違けて築く	◎赤館より1町間隔に築く(本丸多門まで)
・形式	*平城	◎平城
・櫓	*4つ何れも二重 *追手櫓形一重	◎二重櫓4ヶ所 ◎本丸櫓形1ヶ所
・多聞櫓数	*332間(232間の誤記であろう)	◎多聞櫓積
//高さ	*1丈2尺5寸也、本丸は多聞をもつて閉鎖す	◎東西33間、南北44間半 ◎土手高さ本丸の分3間半
・本丸敷地	*東西33間、南北40間半	◎37間隔は20間又は18間隔 ◎17間から35間隔◎延長合計42.2、5間 ◎凡そ4間 ◎土手4間 ◎水下2間1尺
//土手高さ	*3間半	◎四方櫓、延長合計67.6間
//堀の広さ	*2.0間	◎土手高さ二の丸の分7尺5寸 1.4間半より7間まで ◎5間より1.0間迄 凡3間2尺
//堀の深さ	*4間	◎2間より3間3尺迄 ◎土手高さ8間 但、4丈8尺は濠水よりの積
//堀の水の厚さ	*2間1尺	凡14932坪3合 但、土塀共 凡23665坪 但、塀共 凡3937坪5厘
二の丸敷地	*四方櫓、間敷583間	凡4丁35間四方 但本丸、二の丸共 ◎本丸、二の丸北西168間、南東130間 西の方凡4丈8尺、北東間は取半間敷向屋積き
//櫓の高さ	*6尺5寸	◎土手高さ8間 但、4丈8尺は濠水よりの積
//土手の高さ	*7尺5寸	416の内、矢狭間7.4、鉄砲間3.42 91.8の内、矢狭間2.26、鉄砲間6.92 13ヶ所有之
//堀の広さ	*8間	3四立 1ヶ所 17四立1ヶ所 10四立1ヶ所 20匹
//堀の深さ	*3間2尺	
//堀の水の厚さ	*7尺あり	
・本丸坪数	*凡11932坪3合 但、土塀共	
・二の丸坪数	*凡23665坪 但、土塀共	
・本丸建家坪数	*凡3937坪7分5厘	
・城地大きさ	*凡4丁35間四方 但本丸、二の丸共	
・城の高さの事	*西の方凡4丈8尺 北東間は取半間敷向屋積き 但、4丈8尺は濠水よりの積	
・本丸旗間数		
・二の丸旗間数		
・城内井戸数		
・本丸櫓数		
・城外櫓数		
・馬数		
	*印は東白川郡治史記載の項目	◎印は正保絵図にある記載の項目

Study on the Construction of Tanakura Castle by Niwa Nagashige, the restorative study of the main palace
 Furukawa Toshio

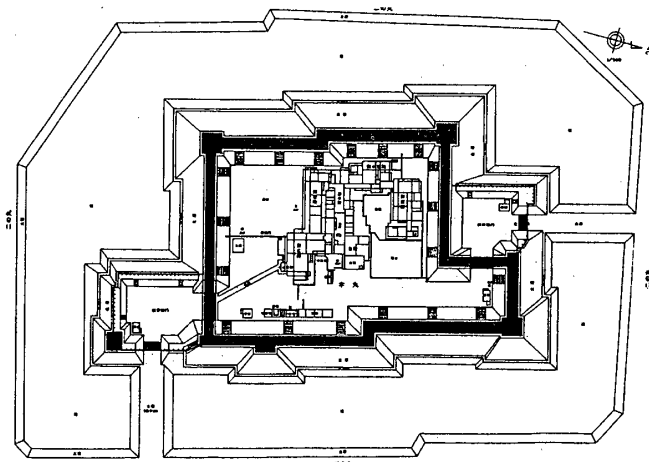
で北と南の二門を構え、3基の二重隅櫓と大手筋に1基の二重櫓の計4基があり、本丸御殿を高さ3間半の高土居で囲む。櫓門と二重櫓間はすべて多間櫓が連結して作事されていて完結型多間櫓圍繞の縄張をとり、棚倉城を特徴づけている。高土居構えの上に建つ多間櫓圍繞の城郭は全国的に見ても非常に珍しい例と言える。別図(1)

4. 多間櫓圍繞について

復元の結果、多間櫓惣間数は外周で234間、二階櫓を除いて惣間数は204間に及ぶ。旧記には多間櫓間数が332間とあるが232間の誤記とすれば復元の結果とほぼ符合する。また、慶長17年(1612)に徳川氏が天下普請で築いた名古屋城本丸多間櫓惣間数でも256間である。別表(2)で本丸多間櫓圍繞の城を一覧とした。

棚倉城の多間櫓惣間数は同時期に修築された京都二条城本丸の246間に近似するから、奥州で唯一の大規模な多間櫓圍繞の縄張と言える。徳川氏築城の多間櫓梁間はほとんど3~4間で、棚倉城では2~2間半の作事である。弘化2年(1845)松平康爵代の土居修復図には完結型多間櫓圍繞の縄張が描かれ、櫓や多間櫓の梁間寸法が分かる。多間櫓は北西隅櫓と南西隅櫓の間、北東隅櫓両側鍵の手に梁間2間半であるが、北と南の櫓門の両側は梁間2間で作事されていて、櫓門の梁間が2間半であることによる。また、白河城の梁間は櫓門で2間半、多間櫓で2間であるが、多間櫓圍繞の縄張はとらない。

寛永3年完成の棚倉城と同4年築城開始の白河城は両城とも丹羽氏の縄張になることから、櫓、櫓門、多間櫓、御殿などが白河城と同等規模になるか、または白河城の規模以上の作事になることは無いと言える。ここでは、両城の縄張の比較検討は割愛し、他の機会に述べたい。



奥州棚倉城本丸復元図 別図(1)

5. おわりに

丹羽氏の棚倉移封は藤堂氏の推挙とも言われ、縄張に藤堂氏の関与を伺わせる。多間櫓圍繞の縄張は藤堂氏好みの手法で、別表(2)に関与した城郭の一部をのせた。

寛永元年(1624)9月からほぼ2ケ年で完成した棚倉城は大規模な多間櫓圍繞の縄張を有し、奥州地域では特異な存在である。この縄張は軍略的な意味が強く、慶長年間(1596~1614)に東西両陣営の緊張関係の中で数多く出現したが、戦後復興として最大の多間櫓圍繞をもつ寛永7年(1630)修築の徳川大坂城で終息した。

また、完結型縄張が多く築かれていることは、櫓圍繞間の類焼防御という解釈だけでは、非完結型縄張の十分な説明が出来ないから、軍略的側面から捕える必要がある。北条流縄張図に、「城ノ回ハ渡リ櫓ヨリハ塀ヲ好ナリ郭外ノ地形ニヨリ処々ニ切戸塀ヲ仕大筒石火筈シカケ可申為也」とあり、塀や切戸塀が重要であると指摘している。

【本丸四方多間櫓造一覽】 別表(2)

本丸四方多間櫓造とは、城郭の本丸周囲が天守、御門、二重櫓、三重櫓などと連結して圍繞されている形態を指すものとし、多間櫓によって完全に圍繞されているものを完結型、囲いが一部でも途切れているものを非完結型と分類し、それぞれ(□)で示す。また、完結型、非完結型でもなく本丸城地に三方、非連続型に多間櫓が配されたものは(×)で示す。

四方多間櫓造が本丸城地以外の天守丸、二の丸など一体的に圍繞されている場合もあり、備考欄に記す。多間櫓間数は櫓門、隅櫓、平櫓、天守等を含めず多間櫓(矢倉、長屋等も同)の惣間間数とする。

城郭名(再築)	国名	石高(石)	築城者	築城年(西暦)	藤堂氏関与の縄張	普請形態	完結型	非 "	多間櫓梁間	多間櫓惣長	本丸惣長	比率 W/L(%)	築基	城地	城地広さ	備考
1 駿府城(再築)	駿府		徳川氏	慶長13年(1608)	◎	大名賦役		□	3間~4間	335間	403間	83.13	石垣	平城	東西南北 88.0間 79.0間	天守台、本丸多間圍い有
2 龜山城(修築)	丹波	3.2	岡部氏	慶長15年(1610)	◎	大名賦役		×	2間~2間半	116間	198間	58.59	石垣	平山城	東西南北 99.0間 25.0間	
3 名古屋城(新築)	尾張	48.0	徳川氏	慶長17年(1612)	○	大名賦役		□	3間	256間	373間	68.63	石垣	平城	東西南北 67.0間 72.0間	
4 和歌山城(修築)	紀伊	37.0	浅野氏	慶長18年(1613)			□		2間	61間	80間	76.25	石垣	平山城	東西南北 20.0間 14.0間	天守丸のみ
5 棚倉城(新築)	陸奥	5.0	丹羽氏	寛永3年(1626)	○		□		2間~2間半	204間	246間	82.93	土居	平城	東西南北 33.0間 44.5間	
6 二條城(修築)	京		徳川氏	寛永3年(1626)	◎	大名賦役	□		3間	246間	298間	82.55	石垣	平城	東西南北 61.0間 61.0間	
7 徳川大坂城(修築)	摂津		徳川氏	寛永7年(1630)	◎	大名賦役		□	3間	430間	593間	72.51	石垣	平山城	東西南北 110.5間 141.0間	

注: 他に、本丸多間櫓圍繞の城郭は高松城(□完、讃岐)、郡山城(×、大和)、岡城(×、豊後)、岸和田城(□完、和泉)、熊本城(×、肥前)、臈所城(□非、近江)、今治城(×、讃岐)、大洲城(×、伊予)、姫路城(×、播磨)、篠山城(□完、丹波)、津城(□完、伊勢)、松江城(×、出雲)、尼崎城(×、摂津)、村上城(□完、越後)、丸亀城(□非、讃岐)がある。また、多間櫓圍繞での初見は天正年間(1591)生駒氏築城の高松城であり、多間櫓惣長の最大規模は徳川大坂城の430間、最小規模は和歌山城の61間である。(1間は6尺5寸とする)